

【博士（学術）】

氏名 川 端 谷津子

〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	通訳の訳出精度に影響を及ぼす SL 要因
授与番号	博甲国第 37 号		—中国語から日本語への訳出の場合—
授与年月日	平成 28 年 9 月 14 日	論文審査員	主査 塚本 尋
授与の条件	学位規程第 5 条		副査 塚本 慶一 邱 鳴

学位論文の要旨

通訳行為において、スピーカーの発話(SL:the Source Language)の各種要素が通訳の質に与える影響は大きいと思われる。この点を踏まえ、本研究では中国語から日本語への訳出を対象に、実際の通訳現場の音声分析と実験的手法を組み合わせ、逐次通訳及び同時通訳において訳出精度に影響を及ぼす SL 要因を探った。結果、①逐次通訳の場合、SL 長は長いほど／過度に短いほど訳出精度が低下する、②SL 話速は遅いほど訳出精度が向上するが、SL 長が過度に長い場合には、SL 話速が如何に遅くとも訳出精度を向上させる効果は抑制される、③語彙難度が高いほど訳出精度は低下し、テキストの予測可能性が低い場合にも訳出精度は低下することがわかった。また、テキストの予測可能性は語彙難度よりも強く訳出精度に影響する SL 要因であり、語彙難度の高いテキストであっても、予測可能性が高ければ訳出精度はある程度向上することが明らかになった。一方、同時通訳の場合には SL 話速が最も強く影響する SL 要因となるが、その他の SL 要因については逐次通訳とほぼ同様に作用することがわかった。ただし、語彙難度とテキストの予測可能性が同等の影響を持つとの点で逐次通訳とは異なっていた。

論文審査結果の要旨

川端谷津子氏より提出された博士学位請求論文「通訳の訳出精度に影響を及ぼす SL 要因 —中国語から日本語への訳出の場合—」は、逐次通訳及び同時通訳の場合においてスピーカーの発話の各要素の解析を手掛かりに、訳出精度に影響を及ぼす要因を探し、あわせて中国語日本語間の通訳者養成方法の改善に対して示唆に富む結果を提示したものである。

【論文の構成】

本論文の構成は、論理的で分かりやすく、目次3ページ、本文89ページ、参考文献・参考 URLs3ページ、巻末資料・データと付表35ページの、計130ページでまとめられている。論文は次の各章により構成されている。

第一章 序論

第一節 問題提起

1. 通訳の特性
2. 問題提起

第二節 訳出精度に影響を及ぼすと推測される SL 要因

1. SL テキストのタイプ
2. SL テキストの長句率
3. SL テキストの語彙難度
4. SL テキストの余剰性

第三節 本研究の目的

1. 本研究の目的
2. 本研究で検証する SL 要因

第二章 第1調査:逐次通訳現場のデータ分析

第一節 第1調査の目的

第二節 調査方法

1. 分析データ
2. 音声の文字起こし
3. 訳出率の算出

4. 訳出率と SL 要因の関係分析

第三節 調査結果

1. 現場A～Dの訳出率
2. SL 長と訳出率の関係
3. 語彙難度と訳出率の関係
4. 各種 SL 話速と訳出率の関係
5. テキストの余剰性と訳出率の関係

第四節 考察

第三章 第2調査:逐次通訳実験

第一節 第2調査の目的

第二節 SL 長、SL 話速以外の SL 要因

1. はじめに
2. SL 長、SL 話速以外の SL 要因の想定

第三節 逐次通訳実験

1. 実験の概要
2. 訳出難度の予測
3. 実験用 SL テキストの作成
4. 実験手順
5. 実験結果

第五節 考察

第四章 総合論議

第一節 通訳におけるテキストの解釈過程

第二節 第2調査における実験用 SL テキストa～dの妥当性

第三節 中国語検定試験リスニング問題の平均点にみるテキストの予測可能性と語彙難度の効果

1. 中国語検定試験 1 級リスニング問題の結果を用いた分析について
2. 語彙難度と平均点の関係
3. テキストの予測可能性と平均点の関係

第四節 同時通訳におけるテキストの予測可能性と語彙難度の

学位論文要旨および審査要旨

効果

第五節 各 SL 要因の影響度合い

1. 逐次通訳の場合
2. 同時通訳の場合

第六節 結論

参考文献

参考 URL

謝辞

巻末資料

【論文の概要】

通訳の質の良し悪しは、通訳者の一方的な努力や能力によってのみ決まるものではない。通訳者がスピーカーと聞き手を媒介するインタラクティブな存在である以上、仮に言語能力・知識力・認知的能力を完璧に兼ね備え、且つ、相当な経験を有する通訳者であったとしても、スピーカーや聞き手、或いはその他通訳環境から影響を受けて能力を十分に発揮できなくなる可能性は皆無でないからである。特に、スピーカーの発話(SL:the Source Language)の各種要素が通訳の質に与える影響は大きいと思われる。この点を踏まえ、本研究では中国語から日本語への訳出を対象に、逐次通訳及び同時通訳において訳出精度に影響を及ぼす SL 要因(以下、単に SL 要因)を探った。まず、第1調査として、実際の通訳現場の音声进行分析した結果、SL 要因として SL 話速と SL 長が特定された。続いて、第2調査で通訳訓練生を対象とした逐次通訳実験を行ったところ、SL 話速と SL 長のほかに、テキストの予測可能性と語彙難度が SL 要因になることがわかった。更に、川端(2013)で未解決となっていた同時通訳における SL 要因についても再分析を行ったところ、中国語から日本語への訳出では、SL 話速、語彙難度、予測可能性が SL 要因となることが明らかになった。

SL 要因は一つの SL に同時に存在して互いに打ち消しあったり補足しあったりしながら訳出精度を左右する。逐次通訳の場合、SL 長は長いほど訳出精度を低下させるが、SL 長が過度に短い場合にも訳出精度を低下させる。これは、SL 長が過度に短い場合、テキストを理解するための手掛かりが欠乏して予測可能性が低下するためである。また、SL 話速は遅いほど訳出精度が向上するが、SL 長が過度に長い場合には、SL 話速がいかに遅くとも訳出精度を向上させる効果は抑制される。また、語彙難度が高いほど訳出精度は低下し、テキストの予測可能性が低い場合にも訳出精度は低下する。このうち、テキストの予測可能性は語彙難度よりも強く訳出精度に影響する SL 要因であり、語彙難度の高いテキストであっても、予測可能性が高ければ訳出精度はある程度向上する。これは、予測可能性の高いテキストの場合、通訳者は一定長さの SL を聞くことで難易度の高い単語の意味を文脈から想起できるためである。同時通訳の場合にも基本的には逐次通訳と同様に SL 要因が働くが、語彙難度とテキストの予測可能性が同等の影響を持つ点で異なる。これは、同時通訳では一定長さの SL を聞いて語の意味を想起すると手法が通用しないことによる。同時通訳では、逐次通訳よりも高い語彙力が要求されるともいえる。

【各調査の概要】

第1調査として、実際の逐次通訳現場の音声进行分析している。分析データは日本記者クラブのホームページに公開されている通訳音声を用いている。調査手法は論文第二章第二節に記載されている。手順としては、①分析箇所の SL と TL をフィルターや言い直しも含めて可

能な限り全て文字に起こす。②訳出率を算出する。(ステップ1:仮訳出率の算出。ステップ2:「SL のうち未訳でも情報量が変わらない語」をカウント。ステップ3:「TL のうち過剰訳出の影響で意味が変化した語」をカウント。ステップ4:調整訳出率の算出)③訳出率と SL 要因の関係を分析する。

調査結果を分析し(第二章第三節)、考察(第二章第四節)を行って、結果として、SL 要因として SL 話速と SL 長が特定された。

第2調査としては、通訳訓練生を対象とした逐次通訳実験を行っている。これは第1調査では、語彙難度と訳出率の関係が明らかにされなかった点を検証する狙いがあった。語彙難度とテキストの予測可能性の難易度を組み合わせた実験用 SL テキストを作成して、訳出難度を予測した上で、実験対象を2グループに分けて実施し、結果を分析している。(第三章第三節)。

結果として、SL 話速と SL 長のほかに、テキストの予測可能性と語彙難度が SL 要因になることがわかった。

同時通訳における SL 要因についても過去にまとめたデータの再分析を行うことで考察を深めた。これは、筆者が2013年に発表した論文執筆の際に扱ったテレビ放送でのニュース映像の分析データを用いたものである。

結果として、中国語から日本語への訳出では、SL 話速、語彙難度、予測可能性が SL 要因となることが明らかになった。(第四章第四節)

【評価】

本論文は次の5点で評価できると考える。

1、近年来、中国においても MTI を含む多くの中日間通訳者養成プロジェクトが相次いで立ち上げられているが、通訳全過程のメカニズムは未だに必ずしも明白ではないが故に、目的に応じた通訳養成トレーニングは未だ模索されながら、確立されつつある段階であるといっても過言ではなからう。本論文は逐次通訳及び同時通訳の場合、スピーカーの発話の各要素の解析を手がかりに、訳出精度に影響を及ぼす要因を探究し、またそれによって、中日間通訳者養成方法の改善に対して示唆に富む結果を提示してくれた。その意味において、本研究は大いに意義のあるものであり、高い評価に値する。

2、論文各章の分析は緻密で着実であり、論理展開も明快である。証明は正確であり、研究者としての高い能力を示している。論文前半は、4例の現場通訳音声データをデータとして、SL 長と SL 話速が訳出率について与える影響を分析し、その相互関係を明らかにすると同時に、更なる問題を提起した。それを受けて、論文後半は、通訳訓練生を対象とした実験を行い、SL 長と SL 話速のほかに、テキストの予測可能性と語彙難度が SL 要因になることを見出した。このように論文構成には論理整合性があり、論述の筋道がはっきりしている。分析に当たって、筆者は入念に一字一句を精査し、例えば、訳出率を算出する場合、文末に添付されている資料でもわかるように大変な労力をかけなければ、到底完成できるものではない。

3、訳出精度に影響を与える要因として、SL 長、SL 話速、テキストの予測可能性と語彙難度などは、ある程度推測することができないわけでもない。しかし、いかにそれを実際に検証し、さらに4者の関係を明らかにするかという作業は困難なことである。本論文は前半部で、つまり、SL 長、SL 話速を論ずる場合、必要に応じて主に現場通訳音声を中心に、データの分析を行っているのに対し、後半部では、

学位論文要旨および審査要旨

つまり語彙難度とテキストの予測可能性を論ずる場合、4つのテキストを選定し、実験の材料として使用した。4つのテキストはそれぞれテキストの予測可能性と語彙難度に関して代表的なものであり、このような典型的で、代表的なテキストの選定は本論文において客観的な結果が得られたことと繋がっていると思われる。更にSL長、SL話速、テキストの予測可能性と語彙難度が、それぞれ逐次通訳と同時通訳における訳出難易度へ与える影響の相違に関する指摘も独創性のあるもので、たいへん示唆に富んだものである。

4、本論文の最大の特徴は理論に基づく分析と詳細なデータの裏づけにより、説得力のある結果が導き出される厳密な論述にあると考える。難波博孝(2008)の「コード解釈」と「推論解釈」との理論を用いて、それぞれ「語彙難度」と「テキストの予測可能性」との関連性を指摘し、更に「推論解釈」については「汎用短期記憶装置の内容(狭義の文脈)」、「百科事典的記憶装置の内容(長期記憶)」「物理的環境から直接手に入れることができる情報」の説に基づいて実験用SLテキストの妥当性を論証した。また、中国語検定試験のリスニング問題の平均点にみるテキストの予測可能性と語彙難度の効果との関係を分析した結果によって、テキストの予測可能性が訳出精度に影響を与えることを裏づけた。このように、先行研究を踏まえながら、その理論に基づき、更に独自に通訳現場の資料を整理して分析を行っており、オリジナリティの高い研究課題であると認められる。

5、本論文の最大の意義は、通訳訓練の場における教材選定や、効果的なカリキュラム構築に役立つことである。論文で特定された諸SL要因の調整によって、訓練生のレベルに応じた訓練内容や重点を設定することができるようになり、効率的な訓練が可能となると考えられる。

以上の5点をもって、審査員一同はこの研究の学術的価値を認め、質の高い博士論文であると判断する。口頭発表ならびに口頭試問でも明晰に論旨を述べ、質問には的確に答えて、時間をかけて丹念に作成された論文であることが確認できた。本論文は博士(学術)の学位授与要件を十分に満たしていると判断する。

筆者の川端谷津子氏は、現役の通訳者・翻訳者として、現場での数々の実践に加えて、通訳者養成スクールでの教育現場にも身をおいて日々の業務現場での問題点を敏感かつ的確につかんだ上で、研究に取り組んでいる点も特筆に値する。今後の研鑽・研究によって更なる成果を出すよう期待するものである。

学位論文要旨および審査要旨

〔博士（学術）〕

氏名 藤田 由香利

〈学位〉種類	博士(学術)	論文項目	中国語教育における通訳技術訓練の導入研究
授与番号	博甲国第 38 号		一日本語母語話者の中国語学習初期における
授与年月日	平成 29 年 3 月 31 日		クイックレスポンス導入の効果―
授与の条件	学位規程第 5 条	論文審査員	主査 塚本 尋 副査 塚本 慶一 邱 鳴

学位論文の要旨

本研究は中国語学習者のリスニング力の強化において学習効果を上げる1つのアプローチとして、クイックレスポンス練習法の有効性を検証することを目的とする。語学学習にクイックレスポンスを導入して単語の暗記を行うことにより、インプットとアウトプットをバランスよく取り入れることができ、語彙定着へと繋がる。また、素早く単語に反応する練習を重ねることで音声への反応速度が向上し、キーワードの把握や聴き飛ばすといったリスニング力の強化に繋がる。

こうした理論を基に、中国語の学習初期を対象とし、日本語母語話者にクイックレスポンス導入による効果検証を 3 種類の調査にて行い、その結果を比較分析することにより結論へと導いた。

本研究を進めるにあたり、語学教育における学習法と通訳訓練法の両面から考察を進めることが大枠となる。語学教育については SLA (Second Language Acquisition) 研究の観点からインプットとアウトプットのバランスや言語学習ストラテジーを取り上げることでリスニング力強化に必要な要素を確認した。一方で、通訳訓練法としては様々な訓練法の中から、素早く単語に反応する練習を重ねることでリスニングに必要な音声への反応速度が向上し、聞き取れない単語が出てきた場合に、その単語を飛ばして次の音声に集中するといった力も向上するクイックレスポンスについてリスニング力強化の可能性を述べた。そして通訳訓練としては基礎トレーニングであるクイックレスポンス練習法の具体的効果や語学学習への取り入れ方を先行研究と予備調査から検討を行った。

具体的な構成として、第 1 章では、語学教育の学習法と通訳者養成のための訓練法は区別しなければならないことを前提としながらも、近年では語学教育への通訳訓練法導入による効果が示され、徐々にその導入が浸透しつつある背景を述べた。

それを踏まえたうえで通訳訓練法と中国語教育の双方から考察することで結論に導くための全体構成を述べた。

第 2 章では中国における対外漢語教育と日本での中国語教育について取り上げた。時代の流れと共に第二外国語としての中国語教育にも教養としての知識から実践として使える中国語を習得することが求められるようになり、その教授法も変化し、今日では様々な実践的教授法が展開されている中で、特にリスニング強化についての指導方法などの現状把握を行った。

第 3 章では SLA 研究のうち、インプット仮説と自動化理論を取り上げ、大量のインプットと少量のアウトプットをいかにして行うべきかを検討した。また自律学習を促すことを目的とした言語学習ストラテジーからリスニング力の強化に関わる部分を調査し、どのようなアプローチがリスニング力の強化に期待できるのか考察を行った。

第 4 章では日中通訳技術訓練法について、技術的な機能強化と理解を深める意識強化のトレーニング方法について述べたうえで、機能強化であるクイックレスポンスの位置づけやその効果を示した。そしてクイックレスポンス練習法を行う場合、どういった言語学習ストラテジーに当てはまるのかを考察し、クイックレスポンスとリスニング力向上の関連性を示した。

第 5 章にて、中国語教育へのクイックレスポンス導入事例を挙げた。そしてこれまでの導入事例では通訳訓練を総合的に取り入れることにより語学力向上を図っており、クイックレスポンスのみを取り上げた場合の具体的効果については不鮮明であることを述べ、クイックレスポンス導入にあたっての導入方法や注意すべき項目、また具体的効果を示すための評価方法などを考察した。

第 6 章では日本語母語話者を対象とし、リスニング力を強化する練習法として中国語学習初期におけるクイックレスポンスの導入調査を行った。調査対象は筆者の勤務校で中国語の科目を履修している 1・2 年生の学生 15 名に協力を得た。学習者個人の伸びを測定するため、学習者が単語を暗記する際にクイックレスポンスを導入した場合と導入しなかった場合、また音声聞きながら単語暗記を行った場合と音声を聞かずに暗記した場合に分けて検証し、それぞれ個別に比較を行った。調査は多方向から効果を検証するため 3 種類行った。反応速度と語彙定着率を測定するクイックレスポンスの口頭確認による調査、単語の暗記法とリスニング力向上の効果を測定するリスニング内容理解による調査、そして数値と学生の感覚によるずれを確認するアンケートによる学生の意識調査である。

第 7 章では、前章での 3 種類の調査それぞれの結果を受けて、中国語の初期学習者にクイックレスポンスを取り入れることで、語彙の定着と反応速度に変化が見られ、リスニング力の強化にも繋がるのではないかと、ということに対して数値からある一定の結果が見られた。そこで、3 種類の調査結果を個別ではなく全体として横断的に比較考察した場合にどういったケースが発生しているかを分析することにより、傾向別に分類を行った。そして、第 8 章では研究の結論と今後の課題について述べた。

本調査を通じて、クイックレスポンスによる単語への反応速度を具体的数値にて記録し比較することで、学習者自身の感覚だけではなく個人の学習効果を可視化することができた。

反応速度について、クイックレスポンス導入で最も効果のあった学生は、音声を聞かずに自身の学習方法で単語リストの暗記を行った 1 回目の場合と単語リストの音声を聞きながらクイックレスポンス練習法にて暗記を行った 3 回目の場合との比較で 3 回目の方が 5.72 秒速まっており、

学位論文要旨および審査要旨

また単語リストの音声聞きながら自身の学習法にて暗記を行った 2 回目とクイックレスポンス練習法にて暗記を行った 3 回目との比較で 3 回目の方が 1.82 秒スピードが速まった。反応速度が速まることで語彙定着にも繋がっていることが確認できた。

また 3 回行ったリスニングテストの結果を見ても、クイックレスポンス練習法にて単語の暗記を行った場合に 15 名中 13 名が高得点であり効果があったと言える。

第 7 章の調査結果の比較考察では 3 種類の調査を横断的に比較することで、単独の調査では明確に示されなかったクイックレスポンスのリスニング力強化に与える影響がみられた。反応速度に変化がみられることによりリスニング力の強化に繋がる場合や、語彙の定着からリスニング力の強化に繋がる場合など、今回の調査では 5 種類の反応に分類することができ、ある一定の傾向が見られることが分かった。効果が見られなかった場合にも導入期間や導入方法など様々な要因が考えられるため効果がなかったという断定はできない。必ずしも対象学生全員にクイックレスポンスが適しているとは限らないが、リスニング力の強化のための手法として、クイックレスポンスを上手く導入することができれば、リスニング力の強化の具体的練習法として取り入れることができる。という結論に至った。

様々な不確定要素から課題は残るものの、クイックレスポンスを導入することで、学習者にはいくつかの傾向が見られ、リスニング力の強化に繋がっているという 1 つの根拠となった。今後も更なる研究を重ねることによって、教室での指導の他に自律学習を促す方法として取り入れることで日本語母語話者の抱えるリスニングに対する苦手意識は弱まり、学習者によりの確な指導を行えることが期待できると考える。

論文審査結果の要旨

藤田由香利氏より提出された博士学位請求論文「中国語教育における通訳技術訓練の導入研究 ―日本語母語話者の中国語学習初期におけるクイックレスポンス導入の効果―」は、通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスを中国語教育に導入する効果についての研究である。

通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスが外国語教育に役立つという見方は従来からあったものの、それをいかに科学的に実証し、その機能のプロセスを論理的に説明できるかは、未だ解明されていない点が多く残っている。その意味において、本研究は大いに意義がある。

【論文の構成】

本論文の構成は、論理的で分かりやすく、目次3ページ、本文68ページ、参考文献6ページ、関連資料としての調査・記録データ8ページの、計85ページでまとめられている。論文は次の各章により構成されている。

第 1 章 研究の背景と目的

- 1.1 研究の背景
 - 1.1.1 通訳訓練と語学学習の目的の相違点と共通点
- 1.2 語学教育における通訳技術訓練法の導入研究
 - 1.2.1 シャドーイングの導入研究
 - 1.2.2 クイックレスポンス導入の可能性

1.3 研究の目的

1.4 研究の構成

第 2 章 中国語教育

- 2.1 中国における対外漢語教育
 - 2.1.1 中国におけるリスニング強化のための指導
- 2.2 日本における中国語教育
 - 2.2.1 日本におけるリスニング強化のための指導

第 3 章 SLA 研究

- 3.1 インプット仮説と自動化理論
- 3.2 言語学習ストラテジー

第 4 章 日中通訳技術訓練法

- 4.1 通訳者に求められる能力
- 4.2 通訳技術訓練法
 - 4.2.1 技術的機能強化による訓練法
 - 4.2.2 意識的強化による訓練法
- 4.3 クイックレスポンス

第 5 章 中国語教育への通訳訓練法の導入事例

- 5.1 高等学校における外国語教育でのクイックレスポンス導入
 - 5.1.1 英語教育(越智美江)
 - 5.1.2 中国語教育(金子真生)
- 5.2 大学における中国語教育でのクイックレスポンス導入
 - 5.2.1 通訳訓練法導入の有効性について(古川典代)
 - 5.2.2 通訳訓練法を取り入れた初中級の授業(永田小絵)
 - 5.2.3 クイックレスポンスの導入法について(藤田由香利)

第 6 章 中国語学習者へのクイックレスポンス導入調査

- 6.1 調査概要
 - 6.1.1 調査対象
 - 6.1.2 教材の作成
- 6.2 調査方法
 - 6.2.1 教室活動
 - 6.2.2 教室外活動
- 6.3 調査結果
 - 6.3.1 クイックレスポンスの口頭確認による調査
 - 6.3.2 リスニング内容理解による調査
 - 6.3.3 アンケートによる学生の意識調査

第 7 章 クイックレスポンス導入による可能性

- 7.1 クイックレスポンス導入による効果がみられたケース
 - 7.1.1 語彙の定着と反応速度が速まったことによりリスニング力が向上した
 - 7.1.2 語彙の定着からリスニング力が定着した
 - 7.1.3 反応速度が速まったことからリスニング力が向上した
- 7.2 クイックレスポンス導入による効果がみられなかったケース
 - 7.2.1 問題形式に慣れることによってリスニングが向上した
 - 7.2.2 クイックレスポンスによる効果がリスニング力の向上に繋がらなかった

第 8 章 まとめ

- 参考文献一覧
- 謝辞
- 関連資料【調査 記録データ】

【論文の概要】

本研究は中国語学習者のリスニング力の強化において学習効果を上げる 1 つのアプローチとして、クイックレスポンス練習法の有効性を検証することを目的としている。語学学習にクイックレスポンスを導入して単語の暗記を行うことにより、インプットとアウトプットをバランス

学位論文要旨および審査要旨

よく取り入れることができ、語彙定着へと繋がる。また、素早く単語に反応する練習を重ねることで音声への反応速度が向上し、キーワードの把握や聴き飛ばすといったリスニング力の強化に繋がる。

こうした理論を基に、学習初期の中国語学習者を対象とし、日本語母語話者にクイックレスポンス導入による効果検証を3種類の調査にて行い、その結果を比較分析することにより結論を導き出している。

本研究を進めるにあたっては、語学教育における学習法と通訳訓練法の両面から考察を進めることを大枠としている。語学教育については SLA (Second Language Acquisition) 研究の観点からインプットとアウトプットのバランスや言語学習ストラテジーを取り上げることでリスニング力強化に必要な要素を確認している。一方で、通訳訓練法としては様々な訓練法の中から、素早く単語に反応する練習を重ねることでリスニングに必要な音声への反応速度が向上し、聞き取れない単語が出てきた場合に、その単語を飛ばして次の音声に集中するといった力も向上するクイックレスポンスについてリスニング力強化の可能性を述べている。そして通訳訓練としては基礎トレーニングであるクイックレスポンス練習法の具体的効果や語学学習への取り入れ方を先行研究と予備調査から検討を行っている。

具体的な構成として、第1章では、語学教育の学習法と通訳者養成のための訓練法は区別しなければならないことを前提としながらも、近年では語学教育への通訳訓練法導入による効果が示され、徐々にその導入が浸透しつつある背景を述べている。それを踏まえうえで通訳訓練法と中国語教育の双方から考察することで結論に導くための全体構成を述べている。

第2章では、中国における対外漢語教育と日本で中国語教育について取り上げている。時代の流れと共に第二外国語としての中国語教育にも教養としての知識から実践として使える中国語を習得することが求められるようになり、その教授法も変化し、今日では様々な実践的教授法が展開されている中で、とくにリスニング強化についての指導方法などの現状把握を行っている。

第3章では SLA 研究のうち、インプット仮説と自動化理論を取り上げ、大量のインプットと少量のアウトプットをいかにして行うべきかを検討している。また、自律学習を促すことを目的とした言語学習ストラテジーからリスニング力の強化に関わる部分を調査し、どのようなアプローチがリスニング力の強化に期待できるのかを考察を行っている。

第4章では日中通訳技術訓練法について、技術的な機能強化と理解を深める意識強化のトレーニング方法について述べたうえで、機能強化であるクイックレスポンスの位置づけやその効果を示している。そしてクイックレスポンス練習法を行う場合、どういった言語学習ストラテジーに当てはまるのかを考察し、クイックレスポンスとリスニング力向上の関連性を示している。

第5章では、中国語教育のクイックレスポンス導入事例を挙げている。そしてこれまでの導入事例では通訳訓練を総合的に取り入れることにより語学力向上を図っており、クイックレスポンスのみを取り上げた場合の具体的効果については不鮮明であることを述べ、クイックレスポンス導入にあたっての導入方法や注意すべき項目、また具体的効果を示すための評価方法などを考察している。

第6章は日本語母語話者を対象とし、リスニング力を強化する練習法として中国語学習初期におけるクイックレスポンスの導入調査を行った記録である。調査対象は筆者の勤務校で中国語の科目を履修している1・2年生の学生 15 名である。学習者個人の伸びを測定するため、学習者が単語を暗記する際にクイックレスポンスを導入した場合と導入しなかった場合、また音声聞きながら単語暗記を行った場合と、音声聞かずに暗記した場合に分けて検証し、それぞれ個別に比較を行っている。調査は多方向から効果を検証するため

3種類行われている。反応速度と語彙定着率を測定するクイックレスポンスの口頭確認による調査、単語の暗記法とリスニング力向上の効果測定するリスニング内容理解による調査、そして数値と学生の感覚によるずれを確認するアンケートによる学生の意識調査である。

第7章では、前章での3種類の調査それぞれの結果を受けて、中国語の初期学習者にクイックレスポンスを取り入れることで、語彙の定着と反応速度に変化が見られ、リスニング力の強化にも繋がるのではないか、ということに対して数値からある一定の結果が見られたことを導き出している。そして、3種類の調査結果を個別ではなく全体として横断的に比較考察した場合にどういったケースが発生しているかを分析することにより、傾向別に分類を行っている。そして、第8章では研究の結論と今後の課題について論じている。

本調査を通じて、クイックレスポンスによる単語への反応速度を具体的な数値にて記録し比較することで、学習者自身の感覚だけではなく個人の学習効果を可視化することができたとしている。

反応速度について、クイックレスポンス導入で最も効果のあった学生は、音声聞かずに自身の学習方法で単語リストの暗記を行った1回目の場合と、単語リストの音声を聞きながらクイックレスポンス練習法にて暗記を行った3回目の場合との比較で、3回目の方が5.72秒速まっており、また単語リストの音声を聞きながら自身の学習法で暗記を行った2回目と、クイックレスポンス練習法にて暗記を行った3回目との比較で3回目の方が1.82秒スピードが速まったという結果を出した。反応速度が速まることで語彙定着にも繋がっていることが確認できたと判断している。

また3回行ったリスニングテストの結果を見ても、クイックレスポンス練習法にて単語の暗記を行った場合に15名中13名が高得点であり効果があったと言えるという。

第7章の調査結果の比較考察では3種類の調査を横断的に比較することで、単独の調査では明確に示されなかったクイックレスポンスのリスニング力強化にあたる影響がみられた点を論じている。反応速度に変化がみられることによりリスニング力の強化に繋がる場合や、語彙の定着からリスニング力の強化に繋がる場合など、今回の調査では5種類の反応に分類することができ、ある一定の方向が見られることが分かったと述べている。効果が見られなかった場合にも導入期間や導入方法など様々な要因が考えられるため効果がなかったという断定はできないとしている。必ずしも対象学生全員にクイックレスポンスが適しているとは限らないが、リスニング力の強化のための手法として、クイックレスポンスを上手く導入することができれば、リスニング力の強化の具体的練習法として取り入れることができる、という結論を導いている。

様々な不確定要素から課題は残るものの、クイックレスポンスを導入することで、学習者にはいくつかの傾向が見られ、リスニング力の強化に繋がっているという1つの根拠となった。今後も更なる研究を重ねることによって、教室での指導の他に自律学習を促す方法として取り入れることで日本語母語話者の抱えるリスニングに対する苦手意識を軽減させ、学習者により的確な指導を行えることが期待できるであろうとしている。

【審査結果】

本論文は、通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスを中国語教育に導入する効果についての研究である。

通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスが外国語教育に役立つという見方は従来からあったものの、それをいかに科学的に実証し、その機能のプロセスを論理的に説明できるかは、未だ解明されていない点が多く残っている。その意味において、本研究は大

学位論文要旨および審査要旨

いに意義がある。

本論文は主に二つの部分によって構成されている。第一部分は第1章から第5章までであり、主にクイックレスポンスを中国語教育に導入する可能性と、導入の意義及び従来の研究を理論と実践の両面から論じている。第二部分は第6章から第8章までであり、実際の調査によって、第一部で立てた予測を論証するという構成である。

第一部分において、筆者はまず、通訳訓練の方法を語学学習に導入する可能性について論じている。通訳訓練と語学学習は相違する部分がある一方、一致する点も存在する。それは通訳訓練の機能強化部分と語学学習の運用能力強化部分である。

実際の例として、語学教育における通訳技術訓練法の導入についての研究、例えば、シャドーイングについての研究は英語分野においては、早くから行われており、その成果を示す文献も多いことは筆者が指摘している通りである。一方、クイックレスポンスについては、通訳訓練では基礎トレーニングであるにもかかわらず、語学教育への導入としてはあまり取り上げられておらず、また、研究対象ともされていない。

第二部分において、筆者は第一部分の論述を踏まえ、中国語学習者へのクイックレスポンス導入調査を実施し、それによる学習効果が認められることを実証している。

論文のポイントは第二部分にあり、15名の学生を対象に行った調査を通じて、クイックレスポンスによる単語への反応速度を具体的数値にて記録し、比較することで、学習者の学習効果を可視化した。更に調査結果の比較考察では3種類の調査を相互に比較することで、単独調査では明確に示されなかったクイックレスポンスがリスニング力の強化に与える影響を浮かび上がらせた。

論文の分析は緻密で着実であり、より多くの角度からの観察と分析は結論の客観性と正確性に繋がっていると思われる。

本論文はリスニング力を強化するための練習法の一つとして、通訳技術訓練法の一つであるクイックレスポンスを導入することにより、更に効果的に中国語学習を行えることを証明しており、外国語教育の指導に関して示唆に富んだ研究成果であり、その意義は評価に値する。

以上の点をもって、審査員一同はこの研究の学術的価値を認め、質の高い博士論文であると判断する。口頭発表ならびに口頭試問でも明晰に論旨を述べ、質問には的確に答えて、時間をかけて丹念に作成された論文であることが確認できた。本論文は博士(学術)の学位授与要件を十分に満たしていると判断する。

筆者の藤田由香利氏は、勤務先大学での教育現場で日々の教育実践の中で問題点を敏感かつ的確につかみつつ、自らの受けた通訳訓練を有効に活かして研究に取り組んでいる点は特筆に値する。今後の研鑽・研究によって更なる成果を出すよう期待するものである。